

18節。「世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい。」

「世」（κόσμος、コスモス）は、ヨハネによる福音書ではキーワードの一つ。この福音書では78回も用いられている（他の福音書ではすべて10回以下）

この福音書で「世」という言葉が出てくる最初は下記のとおりである。

1:9 その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。

1:10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。

1章10節には「世は言葉を認めなかった」とあるが、それは「受け入れなかった」という意味であり、「受け入れない」ことは、ここでは「憎む」（μισέω、ミセオー）こととして語られている。

「ここから愛の反対である憎しみについての話が始まる。それは世の憎しみである。その意味はこの愛において成立しているぶどうの木は、必然的に憎しみの対象になるということである。ぶどうの木は中立的な世界に存在するのではない。世の憎しみという場合、世があつてそれが憎しみを実行するというのではなくて、むしろ逆にイエスに対する憎しみが生まれ、それが世を形成するというべきであろう。すなわちぶどうの木が栄えること、それが多くの実を結ぶことを妨げようとする力あるということが明らかにされる。これは弟子たちが知るべきこととして、彼らに語られるべき必須のことなのである。・・・この憎しみはイエスに対する不信仰の世から来る。・・・世はイエスを信じない人の世であるが、世はその支配者を持っている(8:44、12:31、14:30、16:11)。しかしイエスは世に勝ったのである(16:33)。世が弟子たちを憎むのは、弟子たちより先にイエスを憎んだことを知らなければならないと言われている。すなわち憎しみの根底はイエスに対する憎しみである。・・・なぜそもそも愛を求める人間が、愛する者たちに対して憎しみを向けるのかは腑に落ちない。ここに世の矛盾と不透明さがあり、本来のものからの墮落がある。悪の不透明さである。・・・ここで世とはこの憎しみを持つものをさすと言ってもよいであろう。」（伊吹）

19節。「あなたがたが世に属していたなら、世はあなたがたを身内として愛したはずである。だが、あなたがたは世に属していない。わたしがあなたがたを世から選び出した。だから、世はあなたがたを憎むのである。」

「選び出す」（ἐκλέγω、エクレゴー）。ヨハネにおいてはすべて主イエスが弟子たちを選び出すという形で使われている（6:70、13:18、15:16《2回》、15:19）。6章と13章では弟子の一人の裏切りを予告する言葉の中で出てくる。下記の伊吹氏の言葉を借りると、主イエスによりこの「世から選び出された」者となったにも拘わらず、自己愛に強く捕らわれた結果、主イエスを裏切り、「悪魔」とも呼ばれた(6:70)ことになる。

「世はイエスを憎むのであり《18節》、弟子たちはイエスの者であるから憎まれるという

ことが言われている。世は中立でも無関心でもない。それは愛をも知っている（φιλέω、ピレオー）。自己愛としての自分のものへの愛である。倒錯したものであれ、愛なしには存在が不可能なのである。世は倒錯した愛によって倒錯して存在している。ここで3回『世から』という表現が出てくる。「…から（ἐκ、エク）」という由来が存在を規定し、憎しみの働きとなる。この世からということは、その者にとって「自分から」ということである。この世にとって自分がすべてであるということである。すなわちこの世がすべてであるということである。これに対し弟子たちは『世から』の者でない。そのような者として世にある。イエスが世から選び出したのである。ヨハネ福音書では『選び出す』のはすべてイエスであり、莊重な『わたし（ἐγώ、エゴ）』という主語に続くのである。しかし彼らは父がイエスに与えた者たちである《17:6》。イエスによって世から選び出されたということは、ただ世において選び出されたということではなく、『世から』という存在の由来に代わって、世にありながら『世からでない』という新しい存在の由来を受けたということである。従ってその存在は世にあるが《17:11》、世に属するものではないのである。それはイエスと同様の存在を受けたことであり、16節に言われているごとく、イエスがこの世から選び出したのであって、弟子たち自身によっては不可能なことなのである。世によれば、世にある以上、世からの者でなければならない、すなわち『自分から』であって、そうでないこのような異質な者の存在が世にあること容赦できない。その憎しみはイエスにおいて明らかにされたのであって、行き着くところはその存在を抹殺することであった。」（伊吹）

20節. 「『僕は主人にまさりはしない』と、わたしが言った言葉を思い出しなさい。人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたをも迫害するだろう。わたしの言葉を守ったのであれば、あなたがたの言葉をも守るだろう。」

引用の言葉は13章16節。「わたしが言った言葉を思い出しなさい」という言葉は、キリスト者がその信仰に生きるときに受ける迫害、苦難に直面したとき、主イエスが受けられた十字架の迫害、苦難を思い出すことである。

「イエスを信じる者は、そのことで世から栄光と賛美を受けるのではない。イエスは迫害されたのである。弟子であることはイエスとの運命共同体に在ることである。しかしそれは救いのしるしなのである。・・・この迫害の言葉に続いて励ましの言葉が続く。「わたしの言葉を守ったのであれば、あなたがたの言葉をも守るだろう。」この肯定面は『僕は主人にまさりはしない』という言葉にすでに含まれている。主人になされた同じ反応を僕は受けるのである。すなわち世にあって弟子たちの言葉を聞く者たちも出てくるのである。」（伊吹）

21節. 「しかし人々は、わたしの名のゆえに、これらのことをみな、あなたがたにするようになる。わたしをお遣わしになった方を知らないからである。」

「世」と言われていたのがここでは「人々」に言い換えられている。1章10節で「世」と言われていたのが、1章11, 12節では「自分の民」「人々」と言い換えられているのと同じである。「わたしの名」すなわち主イエスの「名」のゆえに、「これらのことをみな」、す

なわち「憎しみ、迫害」を受けるようになる。伊吹氏はここに主イエスによる弟子の派遣をみている。

「憎しみそして迫害は、イエスの名のために起こる。それはヨハネ福音書のキリスト論の核心である派遣ということによって起こる。……。イエスという名は、父から遣わされた者の名なのである。『名のために』とは迫害者がイエスを遣わした方を知らないということの意味する。」（伊吹）

22節. 「わたしが来て彼らに話さなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが、今は、彼らは自分の罪について弁解の余地がない。」

ここでの「罪」は主イエスの言葉を信じないこと。「わたしが来て」とは、父なる神から派遣されたことを表している。「わたしをお遣わしになった方は真実であり、わたしはその方から聞いたことを、世に向かって話している」（8:26）と言われているように、主イエスがこの世に来て、彼ら（世、主イエスを受け入れない人々）に、父なる神から聞いたこと、見たことを話したので、それを受け入れないということは、すなわち、主イエスを派遣した父なる神を受け入れないことであり、それがここで「罪」と言われている。

「イエスが話したということは、福音書に書き記されたことによってあらゆる時代に妥当するのである。」（伊吹）

23節. 「わたしを憎む者は、わたしの父をも憎んでいる。」

「あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知るようになる。いや、既に父を見ている。」（14:7）

「わたしを見た者は、父を見たのだ。」（14:9）

「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである。わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。」（14:10—11）

「迫害者は神を憎むとは言わないかもしれない（8:41参照）。彼らはイエスを憎むのである（18節）。なぜならイエスが父なる神を示すということを拒否して、そう話すイエスを憎むのである。神から派遣された者として唯一の仕方で神を啓示するイエスを、イエスがそのようなことをすることによって憎むのである。喜んでそれを認め受け入れようとしない。それは結局このような派遣の仕方を憎むことであって、それはさらにそのようなイエスの父なる神を憎むことに他ならない。彼らは弁解の余地がないという仕方で神を憎むという、最終的な罪に落ち込むのである。したがってイエスを憎むということが最終的な罪なのである。」（伊吹）

24節. 「だれも行ったことのない業を、わたしが彼らの間で行わなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが今は、その業を見たうえで、わたしとわたしの父を憎んでいる。」

22節で語られている内容とほぼ同じ。ただ22節では「話す」ことがここでは「行う」と言われている。両方合わせると「言葉」と「わざ」である。

25節。「しかし、それは、『人々は理由もなく、わたしを憎んだ』と、彼らの律法に書かれている言葉が実現するためである。」

引用文は、詩編35:19「無実なわたしを憎む者」、もしくは69:5「理由もなくわたしを憎む者」。

「イエスは憎まれるようなことは何もしていない。人間の頭で分からないことについて弟子たちは旧約聖書の預言にその解決を求めたのである。旧約聖書はここで詩編も含め律法と呼ばれている。そしてこの律法は強調されて、距離をとり『彼らの律法』と呼ばれている。・・・『彼らはわたしを理由なく憎んだ』ということは、信仰する者にとってはまさにそれ以外言い表しようのないことを言い当てている。イエスの愛が憎しみを呼ぶということだからである。言葉の成就ということは『言葉が満たされるため』として、12:38、13:18、15:25、17:12、18:9、32、19:24、36などに聖書の成就として用いられている。すなわちヨハネ福音書に描かれているイエスのもたらす救いに関しての事柄は、すべてが人間にとって理解されることではない。ただそのことが躓きの種にならぬように聖書の成就として説明されねばならぬのである。憎しみ、すなわち罪のないイエスが憎まれたということは十字架の出来事に通じ、なぜこれが救いとして必要であらねばならなかったのかは、最終的には人間の理解を上回る神の救いの意思に属しているのである。」（伊吹）

26—27 節。「わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しをするのである。」

聖霊をお遣わしになるという3回目の約束。14章16節と26節では「父」なる神がお遣わしになるとあるが、ここでは主イエスがお遣わしになるとある（16:7も同様）。（「ニケア信条」の聖霊の項目では次のように告白している。「また聖霊を信じます。聖霊は主、いのちの与え主であり、父《と子》から出て、父と子と共に礼拝され、共に栄光を帰せられます。」『讚美歌21』93-4の2）

「証しをなさる」とは、主イエスが言われもなく憎まれることについての証しである。そして証しは具体的には弟子たちの証言による。それをここでは、聖霊が弟子たちにおいてすることとして語っている。

「弟子たちが証しをするということは、聖霊が弟子において証しすることである。このことは共観福音書に既に述べられている（マタイ10:20、マルコ13:11、ルカ12:12）。そこでは会堂で弟子たちが答えるときは聖霊が答えてくれるという約束である。・・・16:2には会堂による迫害について語られている。どのみちこの証しということは法廷的な背景を持っていることがうかがえるであろう。この『証言する』は、14:26の『一切のことを思い起こさせる』ということをも前提にしている。」（伊吹）